

【設立記念シンポジウム 国際人井上円了—その思想と行動—】

## 井上円了の世界旅行

三浦節夫

Abstract:

When did INOUE Enryō 井上円了 (1858-1919) first have the idea of traveling around the world? Maybe it was during the years of Western Studies in Nagaoka 長岡 (Niigata Prefecture 新潟県), or during the period on stipend at Tokyo University? During his life, which lasted 61 years, Enryō traveled the world three times.

Enryō started his first journey in June 1888 at the age of 30, traveling on an eastward route through the United States of America, England, France, Germany, Austria, Italy, Egypt, Yemen and China for one year.

The second journey, undertaken at the age of 44, began in November 1902. This time he took a westward route and traveled around India, England, Wales, Scotland, Ireland, France, Belgium, Holland, Germany, Switzerland, the United States of America, and Canada for 8 months.

The third time, at the age of 53, he took a very different route that led him from the southern hemisphere up to the far north and back into the southern hemisphere. He departed in April 1911 and toured for 9 months through Australia, South Africa, England, Norway, Sweden, Denmark, Germany, Switzerland, France, Spain, Portugal, Brazil, Argentina, Uruguay, Chile, Peru, and Mexico.

By traveling the world, Enryō was refining his understanding and thinking, which he later translated into action. I will try to elaborate on the substance of INOUE Enryō's global perspective.

井上円了（1858年・安政5年–1919年・大正8年、以下円了という）が、世界を旅行しようと思いついたのはいつ頃のことであろうか。新潟県の長岡の洋学校時代か、あるいは東京留学した東京大学時代であろうか。

円了は61歳の生涯において、3度の世界旅行をしている。

第1回は30歳のときで、1888・明治21年の6月に出発して、1年間をかけて、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、エジプト、イエメン、中国という東回りのコースをとった。

第2回は44歳のときで、1902・明治35年の11月に旅立ち、今度は西回りのコースで、インド、イギリス、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、アメリカ、カナダという各国を8ヵ月かけて回った。

第3回は53歳のときで、南極と北極、そして南半球を中心とするという通常の世界旅行と異なるコースをたどった。出発は1911・明治44年の4月で、オーストラリア、南アフリカ、イギリス、ノルウエー、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、スイス、フランス、スペイン、ポルトガル、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ペルー、メキシコを9ヵ月かけて回った。

円了は世界を旅行することによって、自らの思想にその知見を刻み、それを行動に移した。こうした円了の国際的視野の内容を明らかにしてみたい。

井上円了が、世界を旅行しようと思いついたのはいつ頃のことであろうか。新潟県の長岡の洋学校時代か、あるいは東京留学した東京大学時代であろうか。

文末に掲げた地図のように、円了は61歳の生涯において、3度の世界旅行をしている。

第1回は30歳のときで、念願の私立哲学館の創立（1887年・明治20年9月）から1年たらずの1888年・明治21年6月に出発して、1889・明治22年6月に帰国した。1年間をかけて、東回りのコースをとって、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、エジプト、イエメン、中国を回った。

この第1回の世界旅行について、円了は一言でこう結論づけている。「欧米各国のことは日本に安座して想像するとは大いに異なるものなり」。こうして世界を体感した円了は、『欧米各国政教日誌』（上・下編）にその印象をまとめている。この本は日誌という題名をもっているが、本文は日付順ではなく、項目順で、宗教、風俗、習慣を中心に291のテーマに分けて書かれている。そのため、私は残された資料か

ら記録を日誌的にまとめたことがある。そこには、アメリカでの猛暑や野菜の大きさなどに驚いている姿が記されている。ロンドンで地下鉄の駅を尋ねて、「君が立っているところが駅だよ」と言われるなど、まさに「日本に安座して想像」できないことばかりだったのであろう。

この旅行は宗教と政治に関する調査を主目的にしていたが、円了は積極的に学術機関を回ってもいる。オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、パリ大学、ベルリン大学、その他の博物館や美術館を見学している。

この旅行の記録である『欧米各国政教日誌』の最後に円了が記していたのはつぎのような結論である。日本は欧米のものを取り入れて、日本固有のものを捨てる傾向がある。「日本の独立」「独立の精神」を維持するためには、西洋諸国のように、こうした傾向を変えて、日本固有の言語、宗教、歴史、およびその他の日本固有風俗を改良保存しなければならない。

こうした知見を得た円了は、帰国後に、哲学館の独立（新校舎の建設）、および学科の改正（東洋部を主とし、西洋部を副とする）を行っている。

この第1回の世界旅行からおよそ15年後に、円了は第2回の旅行を行っている。第2回は44歳のときで、1902年・明治35年11月に旅立ち、1903年・明治36年7月に帰国した。今度は西回りのコースで、インド、イギリス、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、アメリカ、カナダという各国を8ヵ月かけて回った。

第2回は、はじめにインドで仏跡巡拝し、ついでヨーロッパへ回った。そして、ロンドンで「哲学館事件」の発生を知る。当初、円了はこの旅行の目的を西洋の大学の運営方法を学ぶことに置いていたが、事件の発生を聞いて、その目的を変更したのだろうか。この旅行の主たる部分がロンドンから離れること200マイルのイギリス北部のリーズ市近在のバーリー村に1ヵ月滞在し、さらにアイルランド、ウェールズを巡回して、およそ2ヶ月後にロンドンに戻って来たからである。この第2回の世界旅行の印象は『西航日録』として記録・刊行されている。

父・円了のこの旅行の印象を長男の玄一はこう語っている。「父は第2回の外遊をした折、英国各地を2ヵ月にわたりつぶさに視察した結果、英国人の個人主事、自由主義の長所を認めた。元来彼は、日本人にはめずらしく胆汁質で、神経質なところは微塵もなく、意志が強くて自己の信ずる道を黙々と実行して行くところは、英国人の性格と似通っているので、短期間とはいえ、英国の生活は気に入ったようで

ある。その言論の自由、人格の尊重、社会道德の発達などとくに羨んでいた。」

円了は同じ島国に暮らす日本人と英国人を比較して、日本人の「小国的気質」と英国人の「大国的気質」を指摘し、日本人の改良を訴えた。そして、帰国後、バーリー村での体験などをもとに、「修身教会運動」を提唱し、全国各地、とくに僻地の農村・山村・漁村などで社会道德＝社会教育の講演を巡回して行うようになった。これが円了の全国巡講の始まりである。

しかし、帰国後の円了を悩ましたのは、のちに明治時代の二大思想事件の一つに位置づけられた「哲学館事件」の社会的影響であった。そのために、円了は全財産を寄付して哲学館を財団法人「東洋大学」として、大学から引退した。引退後は一人で、修身教会運動を続け、年間200日以上講演旅行を行い続けた。

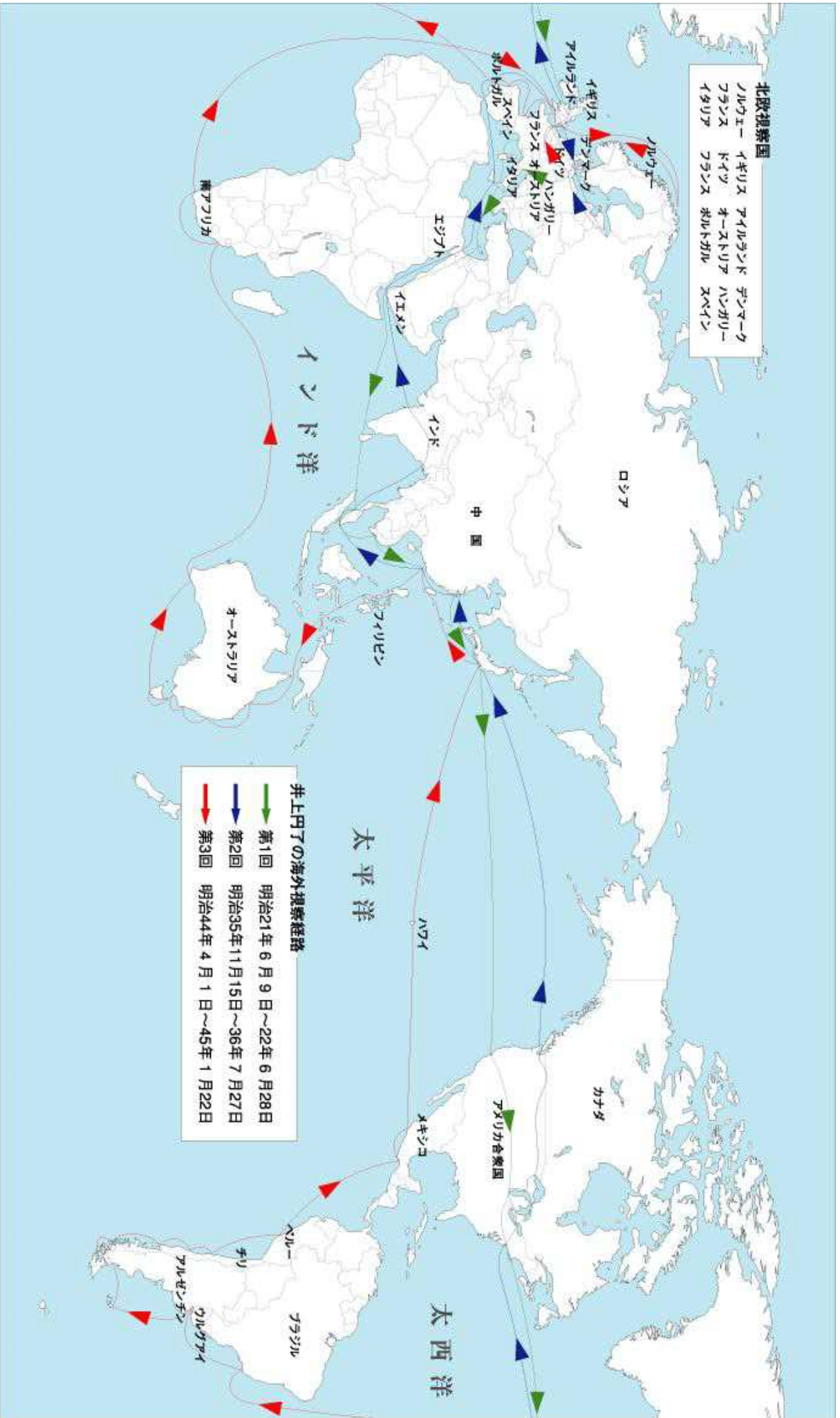
こうした全国巡講を中断して行われたのが第3回の世界旅行である。第2回と今回の間は10年余りの間隔で、年齢は53歳で、南極と北極、そして南半球を中心とするという通常の世界旅行と異なるコースをたどった。出発は1911・明治44年4月で、帰国は1912年・明治45年（大正元年）の1月である。オーストラリア、南アフリカ、イギリス、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、スイス、フランス、スペイン、ポルトガル、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ペルー、メキシコを9ヵ月かけて回った。

すでに述べたように、この第3回は地球を横に回るという当時の通常のルートとは異なって、縦に旅行していることが特徴である。これまでの欧米中心の旅行ではなく、南極、北極を臨める極限まで行き、そして、アフリカ大陸、南米大陸を旅行している。円了の意図は世界の5大陸と2極を訪れて、まさに「世界旅行」を完成しようとしたのであろう。この第3回の記録である『南半球五万哩』を読むと、ニュージーランドから南アフリカ、そしてノルウェーへと展開し、南半球から北半球の両極限を最初に思い立つように回っていることが記録されている。その後、南米各地を旅行している。

第3回の旅行で円了は自ら考えた「世界旅行」を完成させ、そして当時めずらしかった記録である『南半球五万哩』は、実は、日本人による初めての南半球の旅行記であることがわかった（国際井上円了学会のフランス研究集会において、市川義則氏の研究発表による）。全国巡講を各地で展開する円了は、今後の日本人の活躍の場として南米諸国に注目し、講演の題目の一つに位置づけて、移民を奨励してもいた。

円了はこの3回におよぶ世界旅行を通して、世界から日本や哲学館を見ていたが、同時に日本の現実を世界基準に発展させようとも考えていた。国際人としての複眼が円了の思想と行動の特徴になって、その生涯を貫いている。「人間一人が一生でどこまでできるのか、それを試してみたい」という信念とロマンをもった人生であった。1919年・大正8年6月6日、中国の大連で講演中に脳溢血で倒れ、そのまま客死した。円了死去の報道については、国内はもちろん、AP電で海外へも報道された。掲載された『ニューヨーク タイムズ』の記事をみると、円了の種々の業績が紹介されている。その記事では”Dr. Enryo Inouye, a widely known scholar in Buddhist philosophy,” “He had traveled extensively in the United States and Europe.”と記されていて、円了の世界旅行を業績の一つに挙げている。鎖国から開国へと展開した近代日本の中で、円了はもっとも広い国際経験を持った人物として、改めて注目されてよいであろう。

(三浦節夫・東洋大学ライフデザイン学部教授)



北歐探検国

- ノルウェー
- イギリス
- アイスランド
- デンマーク
- フランス
- ドイツ
- オーストリア
- ハンガリー
- イタリア
- ポルトガル
- スペイン

インド洋

太平洋

大西洋

井上円了の海外探検経路

- 第1回 明治21年6月9日～22年6月28日
- 第2回 明治35年11月15日～36年7月27日
- 第3回 明治44年4月1日～45年1月22日